



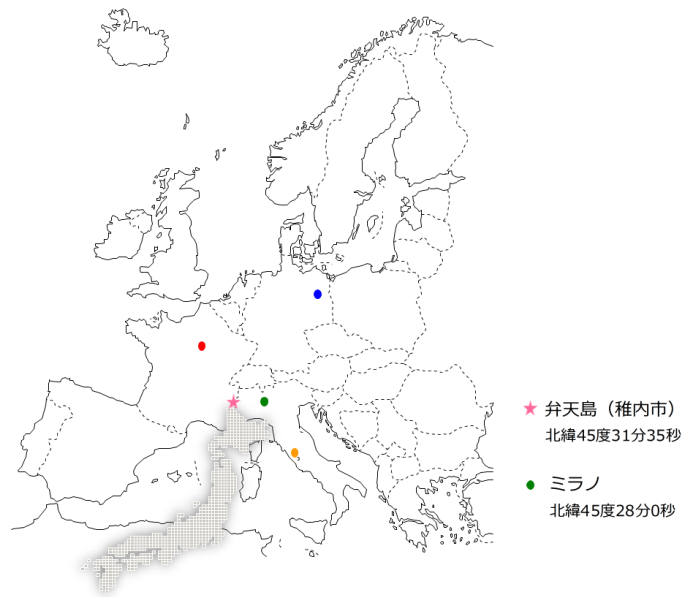
地域研究特講（欧州）

2019年11月7日

担当 入稲福 智

現在、我が国では夏時間の導入が検討されている。それが導入されると、夏季は時計の針が1時間進められることになるため⁴、例えば、午後7時は（ ）時になる。そうすると、通常の時間では、もう日が沈んでいる時間帯でも、まだ明るいいため、屋外でスポーツや散歩を楽しむことができるようになる。

一般に、ヨーロッパ諸国は我が国よりも（ ）に位置している。具体的には、イタリア、フランス、ドイツ、スイス、（ ）といった多くの国にまたがり、それらの国境ともなっている（ ）は北海道の北端よりもさらに北にある。都市で比較するならば、我が国の最北端である弁天島と緯度（北緯45度）がほぼ同じなのはイタリアの（ ）である。フランスの首都（ ）や、ドイツ南部にある（ ）州の州都ミュンヘンの北緯は48度であるため、さらに（ ）に位置する。なお、東京は北緯35度にあるが、それよりも（ ）にあるヨーロッパの都市はない。



夏季、北方では南方よりも日の出が早くなる一方で、日の入りが遅くなる。そのため、（ ）極圏では1日中、日が沈まない「白夜」を体験することができる。ヨーロッパであれば、（ ）半島にあるフィンランドの北方、つまり、北極圏で、それを体験することができる。

これらの点を考慮すると、時計の針を1時間（ ）夏時間を採用するメリットは、我が国よりも、ヨーロッパの方が（ ）と言える。そのため、ヨーロッパ諸国は夏時間を採用しているが、各国で制度が異なると混乱するため、1980年、EUの前身にあたる（ ）は夏時間の導入を決定した。なお、当時の加盟国数は（ ）であった。（ ）年の冷戦終結を経て、（ ）年（ ）月、EUが発足したが、この超国家的組織の決定に基づき、1996年以降、全ての加盟国は毎年3月最後の日曜日から10月最後の日曜日まで、夏時間を採用することになった。そのため、ドイツやフランスは、2019年10月27日（日）の午前3時（26日（土）の27時）、時計の針を1時間戻し、夏時間を終わらせたが、これは（ ）の法律に基づき、一斉に行われた。

⁴ 夏時間に対し、冬時間という表現が使われるが、冬時間とは通常の時刻による。

しかし、夏と冬で時間が異なるのは（ ）といった批判が増えるようになった。また、男性よりも、女性は、体調を崩しやすくなるとされている。

そのため、EUの行政機関である（ ）は、2018年夏、EU史上、初となるWEBアンケートを実施し、夏時間を廃止すべきかどうかEU市民に質問したところ、約480万の回答があり、その内の84%が夏時間の廃止を支持した。これを受け、同機関がEUの立法機関の一つである欧州議会に夏時間の廃止を提案したところ、可決され、遅くとも2021年3月には、夏時間を廃止するという決定が下された。

その後、もう一つの立法機関である（ ）でも審議が始まったが、この機関には（ ）が出席する。具体的に誰が参加するかは、議案ごとに異なるが、夏時間の導入に関しては、各加盟国の運輸大臣ないしそれに相当する者が参加する（ ）で審議される。この機関は、加盟国が半年ずつ交代で議長国を務めることになっているが、2019年上半期議長国を務めたのはルーマニアであった。現在、つまり、2019年下半期の議長国はフィンランドであるが、これらの国の政府によれば、夏時間の廃止に関し、加盟国間で見解が大きく異なっているため、早々に決定が下される見込みはないとされている。